# 侵害における対人動機づけ尺度の作成

髙　田　菜　美・小　杉　考　司

Development of the Transgression-Related Interpersonal Motivations Inventory on Transgression

Nami TAKATA, Koji KOSUGI

**Key words**: forgiveness, avoid, revenge, TRIM-12

キーワード：ゆるし，回避，報復，TRIM-12

## 問題と目的

人は自分を傷つけた相手のことをゆるし，再びその関係性を維持しようとすることがある。この対人間でのゆるしという概念は，古くから世界宗教，特にキリスト教で重要視されてきた。例えば旧約聖書では，ゆるしの主体は神で侵害内容は神との契約違反であるが，新約聖書になるとゆるしの主体として人が挙げられるようになっており（髙田・小杉，2012a，2012b），時代が下るにつれてゆるしという概念の主体に人も置かれるようになったと言える。近年では社会心理学，臨床心理学といった領域で実証研究が盛んであり，ゆるしと関連する状況要因，パーソナリティ，個人特性が明らかにされている。

では，ゆるしはどのように定義できるのか。多くのゆるし研究を概観すると，ゆるしの定義には，痛みや回避といった侵害者に対するネガティブなものの減少もしくは消失，慈愛や哀れみといったポジティブなものの増加といった要素が含まれている（髙田，2014）。ゆるしを進化メカニズムの文脈で論じたMcCullough, Kurzban, & Tabak（2013）は，ヒトが他者から傷つけられた場合の適応的な反応として報復と回避を挙げ，この２つの動機づけの低下もしくは消失をゆるしの定義としている(e.g., McCullough, Bellah, Kilpatrick, & Johnson, 2001)。つまり，侵害という危機的状態に遭遇すると，ヒトは脅威対象を自分から遠ざけたり（回避），対象を自分の目の前から排除しようとするが（報復），相手が自分にとって脅威対象でなくなった場合は自分の近くにいることを許容する。この一連のプロセスが「ゆるし」と呼ばれている。

遺伝的適応性の高い反応である回避と報復であるが，PTSD（Bayer, Klasen, & Adam, 2007; Kunst, 2011），自己愛(Exline, Baumeister, Bushman, Campbell, & Finkel, 2004)，境界性パーソナリティ障害(Sandage, Long, Moen, Jankowski, Worthington, Wade, & Rye, 2015)，うつ(Taysi, Curun, & Orcan, 2015）などといった精神障害との関連が示されている。さらにゆるしは，多くの精神および身体健康指標との関連が示されていることから

(e.g., Lawler et al., 2005; Macaskill, 2012), DSM-5にゆるしという単語は載っていないものの，多くの臨床像に関与している概念であると考えられる。またゆるし研究は，侵害者として両親，パートナー，恋人などといった親密他者が想定されていることが多い（e.g., McNulty & Russell, 2016）。これは，関係が密接なほど侵害が深刻であること（例えば虐待，DV，浮気），侵害の深刻さとゆるしが負の相関関係にあること（Fincham, Jackson, & Beach, 2005）から，親密他者からの深刻な侵害はゆるしに結びつきにくいためと考えられる。以上から，親密他者に対するゆるしを客観的指標を用いて測定することは，臨床的介入を考える上で役立つと考えられる。

ゆるしを測定する尺度は日本を含めた国々で開発されている。例えば，特性や傾向としてのゆるしを測定する許し尺度（加藤・谷口，2009）およびTTF（Brown, 2003），ゆるしの対象を自己，他者，状況に分けているHFS（Yamhure Thompson & Snyder, 2003），侵害者をパートナーに限定しているMOFS（Paleari, Regalia, & Fincham, 2009）などであり，その測定内容は様々である。これはforgiveness（ゆるし）という言葉が表す範囲の広さ，あるいは理論的定義の違いを示している。そしてこれらは特定の侵害における特定他者へのゆるしは対象としておらず，「侵害を受けた後，脅威対象である侵害者から遠ざかろうとするが，次第にそのネガティブな反応が低減していく」というプロセスで定義されるゆるしは測定対象とされていない。

一方本研究では，ゆるしを「特定の侵害を受けた後に生じる侵害者への動機づけの低下」という進化メカニズムの文脈で捉えるため，こうした文脈に沿って尺度構成がなされているTransgression- Related Interpersonal Motivations Inventory（TRIM-12; McCullough et al., 1998）を参考に，この尺度の日本語版を作成することで，ゆるしを別側面から測定することを目指す。TRIM-12は，侵害者への回避および報復的動機づけを測定する尺度で，実際に自分を傷つけた相手に対する態度を回答させる。回避的動機づけ7項目（「出来る限り，彼／彼女と距離をとるようにしてる」など）と報復的動機づけ5項目（「彼／彼女に何か悪いことが起こればいいと思う」）の2因子から構成されている。侵害者に対するポジティブな反応である慈愛的動機づけ項目を加えたTRIM-18（McCullough, Root, & Cohen, 2006）も後に作成されているが，本研究ではこの慈愛的動機づけ項目を含めない。なぜならば，TRIM-18では慈愛項目が独立した因子としてまとまっておらず回避項目と組み合わされていること，慈愛項目の作成および選定基準が明確化されていないこと，慈愛や憐れみなどといったポジティブな動機づけは神による許しという考えが基盤にない日本には必ずしも必要ではないという指摘がある（加藤・谷口，2009）ためである。以上から，本研究では侵害における対人動機づけを測定する尺度，TRIM-12の日本語版を作成することを目的とする。

妥当性検証のため，怒り尺度，既存のゆるし尺度を用いる。ゆるしと怒りには負の相関が示されており（e.g., Barber, Maltby, & Macaskill, 2005；田中，2008），TRIMと怒りには正の相関関係が予測される。

## 研究1

### 目的1

TRIM-12の日本語版を作成し，その項目分析および併存的妥当性の検証を行う。

### 方法1

**参加者**　大学生117名（男性64名，女性53名，平均19.1歳，*SD*=1.88）。

**手続き**　侵害の水準を一定にし，また，親密他者へのゆるしを測定するため，想定させる侵害者と侵害行為をこちらで指定した。「恋人の浮

気や親友の裏切りといった行為を受けた場合，相手に対してどう感じると思いますか」と教示し，以下の尺度に回答を求めた。時間的安定性を検証するため3週間後に同一の調査を実施したところ，有効回答者数は54名（男性23名，女性31名）であった。倫理的配慮として，回答は任意であること，回答途中であっても回答を拒否出来ること，データは統計的に処理され個人が特定されることはないことを質問紙に明記した。

**測定項目**

1. 侵害における対人動機づけ尺度として，McCullough et al.（1998）が作成したTRIM-12を，原著者の許可を得た上で邦訳して使用した。著者が邦訳をおこなった後，アメリカ合衆国出身の大学教授にバックトランスレーションを依頼し，修正を施したものを最終的な尺度項目として，それを仮の日本語版TRIM（以下，J-TRIM）とした。TRIM-12は，犠牲者が侵害者に対して抱く動機づけを測定する尺度であり，回避的動機づけ7項目，報復的動機づけ5項目からなる。「全くそう思わない（1点）」から「とてもそう思う（5点）」の5件法で回答を求めた。合計点が低いほど，ゆるしが高いと言える。

2. 怒りとして，鈴木・春木（1994）のSTAXI

Table 1　平均値，標準偏差，因子負荷量および共通性

| Item（$\alpha$=0.91, $\omega$=0.92） | Factor 1 | Factor 2 | Com | *M* | *SD* |
|---|---|---|---|---|---|
| 第1因子　回避（α=0.91） | | | | | |
| 12．彼/彼女から遠ざかる<br>I withdraw from him/her. | **0.95** | -0.06 | 0.84 | 3.30 | 1.28 |
| 10．彼/彼女を避けている<br>I avoid him/her. | **0.87** | 0 | 0.76 | 3.34 | 1.26 |
| 11．彼/彼女との関係を断った<br>I cut off the relationship with him/her. | **0.86** | -0.04 | 0.7 | 2.99 | 1.25 |
| 6. 出来る限り，彼/彼女と距離をとるようにしている<br>I keep as much distance between us as possible. | **0.83** | 0.04 | 0.73 | 3.29 | 1.23 |
| 9．彼/彼女に暖かく振る舞うのは難しいと分かっている<br>I find it difficult to act warmly toward him/her. | **0.83** | -0.11 | 0.6 | 3.46 | 1.13 |
| 8．彼/彼女を信頼していない<br>I don't trust him/her. | **0.66** | 0.16 | 0.6 | 3.34 | 1.30 |
| 7．彼/彼女が存在せず，近くにいないかのように生活している<br>I live as if he/she doesn't exist, isn't around. | **0.51** | 0.26 | 0.48 | 2.84 | 1.21 |
| 第2因子　報復（α=0.87） | | | | | |
| 5．彼/彼女が傷つき，みじめな姿を見たい<br>I want to see him/her hurt and miserable. | -0.11 | **0.94** | 0.76 | 2.32 | 1.31 |
| 3．彼/彼女が自分の行為の報いを受けることを望む<br>I want him/her to get what he/she deserves. | 0 | **0.91** | 0.83 | 2.99 | 1.29 |
| 2．彼/彼女に何か悪いことが起こればいいと思う<br>I wish that something bad would happen to him/her. | 0.09 | **0.85** | 0.83 | 2.74 | 1.35 |
| 4．私は仕返しするだろう<br>I'm goint to get even. | -0.14 | **0.74** | 0.44 | 2.03 | 1.20 |
| 1．彼/彼女に罰を受けさせるだろう<br>I'll make him/her pay. | 0.15 | **0.57** | 0.46 | 2.51 | 1.19 |
| Inter-Factor Correlations | - | 0.62 | | | |

（State-Trait Anger Expression Inventory）日本語版から，状態怒り尺度を使用した。特性怒り尺度を用いなかったのは，TRIMが個人のゆるしやすさ（ゆるし特性）ではなく特定の侵害に対するゆるしを測定する尺度であることから，犠牲者の特性ではなく状態怒りの方がTRIMと関連を示すであろうと予測したためである。状態怒り尺度は10項目からなり，「怒り狂っている」，「いらいらしている」などの項目で構成されている。「全くあてはまらない（1点）」から「とてもよくあてはまる（4点）」の4件法で回答を求めた。合計点が高いほど，状況怒りが高いと言える。

**結果1**

分析には，統計分析フリーソフトR3.2.4を使用した。

因子的妥当性の検討をするため，ポリコリック相関行列を対象とした探索的因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行ったところ，原論文と同様の因子構造を示し，第2因子までの累積寄与率は67%であった。さらに固有値の減衰状況（第1因子：6.86，第2因子：1.80，第3因子：0.65，第4因子：0.56），スクリープロットの結果から総合的に2因子が妥当であると判断し，2因子解を採用した。回転後の因子パターン，各項目の平均値と標準偏差をTable 1に示す（英語項目はTRIMの原項目）。因子名は原尺度での名称を邦訳したものを用い，「回避因子」および「報復因子」とした。

J-TRIMの内的一貫性を確認するため，尺度全体の$\alpha$係数と$\omega$係数を算出したところ，$\alpha$=0.91，$\omega$=0.92とどちらも高い値を示した。

2因子構造の妥当性を検討するため，共分散構造分析による検証的因子分析を行った。その結果，モデルの適合度はCFI=0.97，RMSEA=0.07，SRMR=0.05であり，わずかにRMSEAの値が高いものの，ある程度当てはまりの良いモデルであると言える。

併存的妥当性を検証するため，J-TRIMとSTAXIとの相関係数を算出したところ，中程度の相関係数を示した（$r$=0.58，95%cl[0.44，0.69]）。下位因子ごとの相関係数をTable 2に示す。

また，得られた得点に男女差があるか確認するため，独立な2群の$t$検定を行った（Table 2）。J-TRIMにおいては男性（$M$=34.03，$SD$=11.03）と女性（$M$=36.53，$SD$=10.38）に差は見られなかった（$t$(116.5)=33.82，95%cl[−0.60，0.13]）。

Table 2　下位因子と他の変数との相関係数と信頼区間

| | 状態怒り | 恨み | 寛容 |
|---|---|---|---|
| 回避 | 0.37[0.17，0.53] | 0.44[0.26，0.59] | −0.29[−0.47，−0.09] |
| 報復 | 0.60[0.45，0.72] | 0.62[0.47，0.73] | −0.19[−0.38，0.02] |

Table 3　性別と下位因子ごとの平均値と標準偏差および効果量と信頼区間

| | | J-TRIM | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | $N$ | 回避 | | 報復 | |
| | | $M$ | $SD$ | $M$ | $SD$ |
| 男性 | 36 | 24.36 | 7.33 | 14.39 | 5.42 |
| 女性 | 55 | 25.11 | 6.31 | 14.27 | 5.36 |
| 効果量 | | −0.11 | | 0.02 | |
| 信頼区間 | | −0.53，0.31 | | −0.40，0.44 | |

## 研究 2

### 目的 2

研究 1 で作成した J-TRIM の収束的妥当性を検証する。また，研究 1 の追試も合わせて行う。

### 方法 2

**参加者**　大学生 91 名（男性 36 名，女性 55 名，平均 18.25 歳，*SD*=0.48）。

**手続き**　教示は研究 1 と同様のものを用いた。倫理的配慮として，回答は任意であること，回答途中であっても回答を拒否出来ること，データは統計的に処理され個人が特定されることはないことを質問紙に明記した。

### 測定項目

1. 侵害における対人動機づけ尺度として研究 1 で作成した J-TRIM の 12 項目を用いた。再度因子分析を行ったところ，研究 1 と同様の因子構造が得られた。内的一貫性を示す係数も十分な値を示した（$\alpha$=0.88, $\omega$=0.92）。
2. 怒りとして，研究 1 と同様，STAXI を用いた。
3. 既存のゆるし尺度として，加藤・谷口（2009）の許し尺度を使用した。恨み因子 12 項目（「私を侮辱したら，その人のことをひどく思い続ける」など）と寛容因子 10 項目（「私を傷つけた人でも，やがて，いい人だと思えるようになる」など）の 2 因子からなり，「あてはまらない（1 点）」から「よくあてはまる（4 点）」の 4 件法で回答を求めた。恨み因子の合計点が高いほどゆるしが低く，寛容因子の合計点が高いほどゆるしが高いと言える。

### 結果 2

分析には，統計分析フリーソフト R3.2.4 を使用した。

収束的妥当性を検証するため，J-TRIM と許し尺度との相関係数を算出したところ，恨み因子とは中程度の相関係数を（*r*=0.62, 95%cl[0.47, 0.73]），寛容因子とは弱い相関係数を示した（*r*=−0.29, 95%cl[−0.47, −0.92]）。下位因子ごとの相関係数を Table 2 に示す。

併存的妥当性を検証するため，J-TRIM と STAXI との相関係数を算出したところ，研究 1 と同様，中程度の相関係数を示した（*r*=0.56, 95%cl[0.40, 0.68]）。

また，得られた得点に男女差があるか確認するため，独立な 2 群の *t* 検定を行った（Table 3）。こちらも研究 1 と同様，男性（*M*=38.75, *SD*=10.35）と女性（*M*=39.38, *SD*=10.12）に差は見られなかった（*t*（90.42）=35.19, 95%cl[−0.48, 0.36]）。

## 考察と今後の展望

本研究は，親密他者による侵害における対人動機づけ尺度の日本語版（J-TRIM）を作成し，その妥当性および信頼性を検討することを目的とした。

分析の結果，J-TRIM は原論文と同様の因子数および因子構造が妥当であると判断された。よって人が侵害者に対して抱く動機づけには文化的影響が少ないと考えられる。また，得点に男女差がみられなかったことから，侵害を受けた場合の人の動機づけには性別の影響は少ないと考えられる。

怒り尺度，既存の許し尺度および怒り尺度とある程度の相関関係がみられたことから，J-TRIM は収束的，併存的妥当性を持つ尺度であると考えられる。また時間的安定性も確認されたことから，J-TRIM の信頼性および妥当性が確認された。

今後の展望として，以下の 2 点を挙げる。まず，調査対象者の年齢についてである。ゆるしは年齢が上がるほど高くなる（e.g., Girard & Mullet, 1997）。その理由として Cheng & Yim（2008）は社会情動的選択性理論（SST; Socioemotional Selectivity Theory）を挙げてい

る。すなわち，高齢者などのように時間を限られたものだと知覚する場合，情動的満足が生じるよう動機づけられることが多く，自身の感情を調節していくことでゆるしが生じやすくなるという。この点から，年齢別に尺度得点分布が変化する可能性があり，今後はこれを検証する必要がある。

次に，ゆるしが生じる以前の認知状態の把握である。ゆるしは犠牲者が侵害を受けた後に抱く侵害者への動機づけであるが，その動機づけがどのような認知によって生じるのかは本研究では明らかでない。つまり，侵害者もしくは侵害行為に対するどのような認識や見方によって回避や報復といった動機づけが生じているのか，言い換えるならば，侵害を受けると人はどのように侵害者をみなすようになるのかが不明なままである。臨床応用を考える上でも，上記の2点は明確にする必要があるだろう。

## 引用文献


Barber, L., Maltby, J., & Macaskill, A.(2005). Angry memories and thoughts of revenge: The relationship between forgiveness and anger rumination. *Personality and Individual Differences*, **39**, 253-262.

Bayer, C.P., Klasen, F., & Adam, H. (2007). Association of trauma and PTSD symptoms with openness to reconciliation and feelings of revenge among former Ugandan and Congolese child soldiers. *Jama*, **298**, 555-559.

Brown, R.P. (2003). Measuring individual differences in the tendency to forgive: Construct validity and links with depression. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 759-771.

Cheng, S.T., & Yim, Y.K. (2008). Age differences in forgiveness: the role of future time perspective. *Psychology and aging*, **23**, 676-680.

Exline, J.J., Baumeister, R.F., Bushman, B.J., Campbell, W.K., & Finkel, E.J. (2004). Too proud to let go: narcissistic entitlement as a barrier to forgiveness. *Journal of personality and social psychology*, **87**, 894-912.

Fincham, F.D., Jackson, H., & Beach, S.R.(2005). Transgression severity and forgiveness: Different moderators for objective and subjective severity. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **24**, 860-875.

Girard, M., & Mullet, E. (1997). Forgiveness in adolescents, young, middle-aged, and older adults. *Journal of Adult Development*, **4**, 209-220.

加藤司・谷口弘一（2009）. 許し尺度の作成の試み . 教育心理学研究 , **57**, 158-167.

Kunst, M.J.J. (2011). PTSD symptom clusters, feelings of revenge, and perceptions of perpetrator punishment severity in victims of interpersonal violence. *International journal of law and psychiatry*, **34**, 362-367.

Lawler, K.A., Younger, J.W., Piferi, R.L., Jobe, R.L., Edmondson, K.A., & Jones, W.H. (2005). The unique effects of forgiveness on health: An exploration of pathways. *Journal of behavioral medicine*, **28**, 157-167.

Lawler, K.A., Younger, J.W., Piferi, R.L., Billington, E., Jobe, R., Edmondson, K., & Jones, W.H. (2003). A change of heart: Cardiovascular correlates of forgiveness in response to interpersonal conflict. *Journal of behavioral medicine*, **26**, 373-393.

Macaskill, A. (2012). Differentiating dispositional self-forgiveness from other-forgiveness: associations with mental health and life satisfaction. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **31**, 28-50.

McCullough, M.E., Bellah, C.G., Kilpatrick, S.D., & Johnson, J.L.(2001). Vengefulness: Relationships with forgiveness, rumination, well-being, and the Big Five. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 601-610.

McCullough, M.E., Kurzban, R., & Tabak, B.A. (2013). Cognitive systems for revenge and forgiveness. *Behavioral and Brain Sciences*, **36**, 1-15.

McCullough, M.E., Root, L.M., & Cohen, A.D. (2006). Writing about the benefits of an interpersonal transgression facilitates forgiveness. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **74**, 887-897.

McNulty, J.K., & Russell, V.M.(2016). Forgive and Forget, or Forgive and Regret? Whether Forgiveness Leads to Less or More Offending Depends on Offender Agreeableness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **42**, 616-631.

Paleari, F.G., Regalia, C., & Fincham, F.D.(2009). Measuring offence-specific forgiveness in marriage: the

Marital Offence-Specific Forgiveness Scale（MOFS）. *Psychological assessment*, **21**, 194.

Sandage, S.J., Long, B., Moen, R., Jankowski, P.J., Worthington, E.L., Wade, N.G., & Rye, M.S.（2015）. Forgiveness in the Treatment of Borderline Personality Disorder: A Quasi-Experimental Study. *Journal of clinical psychology*, **71**, 625-640.

鈴木平・春木　豊（1994）. STAXI 日本語版 山本真理子（編）・堀　洋道(監)（2001）. 心理測定尺度集Ⅱ 人間と社会のつながりをとらえる―対人関係・価値観―サイエンス社 pp.208-213.

髙田菜美（2014）. ゆるし研究の概論, 関西大学大学院心理学研究科心理学叢誌, **12**, 23-31.

髙田菜美・小杉考司（2012a）. 新約聖書ごとのゆるし表現の違い　日本心理学会第76回大会発表論文集, 207.

髙田菜美・小杉考司（2012b）. 旧約聖書ごとのゆるし表現の違い　九州心理学会第73回大会発表論文集, 11.

Taysi, E., Curun, F., & Orcan, F.（2015）. Hope, anger, and depression as mediators for forgiveness and social behavior in Turkish children. *The Journal of psychology*, **149**, 378-393.

Yamhure Thompson, L., & Snyder, C.R.（2003）.Heartland forgiveness scale. In S.L.Lopez & C.R.Snyder（Eds.）, *Positive psychological assessment:A handbook of models and measures*. Washington, DC: American Psychological Association, pp.301-312.